

「見る」と「そのものが私自身である」

前田真二郎

Shinjiro Maeda

私が影響を受けた日本の実験映像とは？

この「実験映像」という言葉を定義づけないと具体的に作品を選ぶことは出来ない。「実験映像」という言葉に引っ掛かり、ペンが進まないのは私だけではないだろう。しかし、引っ掛かってはいけない。その言葉はもはや記号であり意味はないことに気づかなければならない。いきなり脱線しますがまずそのことについて書かせて欲しい。

同世代で「実験映像」という言葉をどう思うかといった論議をしている現場に居合わせたり、その論議に参加したこともあるがいつも空しさが残る。それは、酒の場で幽霊を信じるか信じないかを話したあとの空しさに似ている。論議の最中は盛り上がるのだが、もったいい話題は無かったのだろうか？と残念に思うのだ。殆ど場合はその「実験」という言葉の持つマイナスイメージが論の中心となり、作家の発言としては「実験だけで終わらせているつもりはない」といったことが語られる。

私は自分の作品を「実験映像」と呼んだことはないし、「ビデオアート」と呼んだこともない。しかし自分の作品を「実験映像」と呼ばれても神経質に否定することもない。作家の本音は「作りたいものを作って、人に観てもらって、しかも感動してもらえたら」といったものではないだろうか。実験映像の世界であれ、現代美術におけるビデオアートやメディアアートの世界であれ、劇映画の世界であれ、発表できるのならば、どこでも発表したいというどんな欲な精神があることを自覚している。

私の作品の場合、結果的に実験映像作品として発表されたことが多い。「実験映像」の世界は「映像」というものを掘り下げて探求している世界で、他分野に劣らない圧倒的なクリエイティビティがあり、多少なりとも批評文化があることは間違いない。自分の作品がそのような発表の場を選んでいることは、作家の意図に反している訳ではない。

60年代にアンチ劇映画としての実験映画というムーヴ

メントがあったかどうか、私は正確に知らないのだが、私に限って言えばアンチのポリシーは持っていない。しかし「個人による動画映像表現の探求」は進化論的ではないが継承しているという自覚はある。

「実験映像」という言葉はもはや記号でしかなく、「実験」という言葉についても意味は失われているのではないだろうか。だからといって新たに定義づけるのも意味がない。実験映像とは何かを本当に突き詰めると作家名と作品リストの羅列そのものの提示になるのではないだろうか。もし作品そのものの責任でなく実験映像作品というレッテルのために、ある上映ペースで上映が拒否されたというような事件でもない限り、この言葉は私に影響を及ぼさないと考えている。

そもそも「実験映像」という言葉に対する論議は、社会的な位置づけを含めた作家のアイデンティティについての話ではなかっただろうか。個人による動画映像表現の自律性は言葉そのものではない。自律性をいうのなら、例えば上映料や作品プライスといった部分を含めて、作品完成から観客に観せるまでのシステムに作家自身が責任を持つことの方が重要だろう（もしくは資本主義はないものとして「商品」としてではなく作品を発表していくといったアナキズムの姿勢に腹をくくるのか）。安定期に入っている実験映像の世界の課題はまさにこの部分に違いない。

目をつむって
ごゆっくり お休みください

【休憩】(77)

さて長々と書いてしまったが、本題に入ることにする。谷川俊太郎氏による作品「休憩」(77)のことを最近よく考えている。白テロップの微かな光に包まれた観客席から、サイレントの静けさの中を押し殺した笑い³が響く……その光景を思い出す。映像と観客の関係を見事に浮かびあがらせている。構造の提示に執着せず、暖かい仕上がりになっているのだが、このことは「詩人の粋なセンス」といった問題ではない。「見ること」そのものが私自身であるということを見せたい。必要なら「暖かさ」なのだ。これほど「私」を意識させた映像は見たことがない。

「私は光 私は言葉」という白テロップではじまる現在製作中の作品「I」は「休憩」から少なからず影響を受けていることをこの場を借りて報告しておきます。

(一九六九年生まれ)『FORGET AND FORGIVE』⁹¹、『VIDEO SWIMMER IN BLUE』⁹²、『V』⁹⁴など)